

教生の日誌から

△ 四年次生 岩崎 洋 走

七月〇日

「先生字が違っています」

と言われて、さてどれが？とすぐに気がつかず、果は生徒から教えてもらうまでわからず仕舞に終って顔を赤らめている自分の姿がいまだになかなか忘れられず痛い。

初めて顔を合わす生徒、しかも生まれてはじめて立つ教壇。

僕はそれだけに主観的にはかなり真剣に勉強もしたつもりであるし、導入や時間配分といった、いえば技術的な事に至るまで半ば徹夜して綿密にプランを立てていたのに、実際にはそういった事すべてが無意味で役に立たなかった。教壇に立ったとたん逆にそういったものすべてがひどく小細工に見えた。

それよりも何よりも丸ごとの僕が全生徒の前にさらされる！それは何と恐ろしい事であった事か。知力、技術、体力、能力といった一つずつでなしに、二十何年という僕の歴史が生徒全部の前に置かれるのだから単に勉強の不足を託ってる人はうら

やましい、又、能力の問題にだけしぼって行く事のできる人もいい。僕には僕のそれら一さいをひっくりかえした人間としての質量感のどほしさがいやという程わかったのだ。

教師が教室に入ったとたんに全生徒に信頼感と安定感を感じさせるのは、一夜づけの知識とかいったものではとてもできる技ではない。

教師になる事は―特にこの頃のように他の産業からの求人が多い時は―そんなに難しい事ではなからう。僕もやがて教師になるかも知れない。しかし真に教師たる事はどうんなに難かしい事か、しみじみそう思うのである。

△ 四年次生 栗本千枝子

七月〇日

HR

第二限 一の四で大野先生の授業をみせていただく。

第三限 図書館で下調べ

第四限 二の五で「奥の細道」をやる。

第五限 指導案の書き方研究会へ出る。

「奥の細道」を実習、生徒に騒がれなかったのはせめてもの救いであった。だが静かなのは「奥の細道」がおもしろかったり

わかったからだとするのは早計であろう。あるいは全く受け身でいる姿勢なのかも知れないのだ。私の経験を通して「奥の細道」が彼らにとっておもしろくて声も出ないといったものだとは思えないからである

七月〇日

HR 出席をとり伝達事項を生徒に伝える。

第一限 教生吉兼さんの授業をみる。

第三限 一の三の後藤先生の文法参観
教師業とは何と難かしいものだろうとつくづく感じる。二の二で四時間をいただいて生徒と話す機会を作ってみた。いろいろ心を割ってはなすつもりだったのに、生徒は表面的な事しか答えてくれないし、私にむかって質問してきもしない。全く生徒は敏感だと思ふ。私のどこかにある構えたような、とり澄ました態度をいち早くみつけ出し、決して親しもうとしないのだ。

七月〇日

第一限 教壇に立つ(二の二)

自信どころか教壇に立っただけで目の前ははつきりせず、ひょっと「命令形」という呼び方を度忘れて弱っている所で、生徒から「命令形」といわれてはっとしたり

口から出まかせをのべたてたような気がするし、論理も立たず、どこが要点なのかもわからぬまゝで、とにかく恥かしい一日であった。生徒の一刻一刻の動きをすばやく把握判断し、それに応じた方法が考えられねばならぬのに、私は私の一人芝居しかやっていない。それも大変まずいものであった。

七月〇日

中学校にて

二年生の女生徒が教生の授業時間にはまるで幼稚園にいるような気がする。全くの不満顔で話してくれたのでひどくあわてた。今迄の教生もそうであったとすると、相手の程度を知る科学的な方法を持たないでいたか、実力不足のため生徒に媚びたような授業をしていたかであろう。私の場合はその両方だが前者が第一の原因であることも反省されてくる。大学と同じ構内で中学生をみかけると、彼らはひどく小さくかわいらしく見えるのだが、そういった素人風のかんで動く所に問題があると言える。

七月〇日

第一限 教生吉兼さんの授業参観

何だか自分というものを意識しすぎてい

るような気がする。

今朝二年生の女子から「お早う」と呼びかけられた。ひどくうれしかった。全く交渉をもっていない組なので、今迄私は他人のような顔をしていたのだが。

△ 四年次生 吉兼 賢次

七月〇日

初日のためか、ひどく神経が高ぶって疲れる。

生徒が実習生を何か特別な目で見ている様子がないので内心ホッとした。担当クラスは二ノ一。指導は安藤先生。

七月〇日

こちらの態度に敏感に反応してくる生徒その目はこわいみたいだ。授業態度の比較的よかったのはうれしかった。男子ばかりのクラスは特によかった。女子だけのクラスはもうすこしのびのびしてもいいと思うのだが。

夏のためでもあるか、休み時間に教室で気力なくのびている生徒が見られる。単に気候のせいなのか。

七月〇日

第二限 英語の授業参観

第四限 研究授業担当教生粟本さん

英語は語学の授業であるが、国語は言語の指導以外に文学の指導がある。むしろ僕はそれが主軸でなければならぬとさえ思うのだが、(もちろんこの場合の文学というのは抒情的なものばかりを指しているのではない。)そういった事からか国語と英語の授業には予想以上にひどく違ったものがあるようだ。

教生粟本さんの研究授業はあれだけ多くの見学者の前でやるのだから大変だったろうが、何か機械的な冷たさが感じられた。恐らくそれは教材を自由に使いこなせる主体がなくて、逆に教材にしがみついていた所から起った現象であつたらう。もちろんそれは僕自身に返ってくることであつて、彼女ばかりの問題でないことは言うまでもない。

七月〇日

午後学校からバスで海水浴へ行く。

おかげで生徒とよく接触することができた。のびのびと元気な子供たちだ。しかし一・二ひ弱な感じの子もいる。しかし卑屈な子がいない事は気持がいい。僕にも盛んに話しかけてくる。

一緒にまっ黒になって泳いだのだが、教

師というものは一緒に楽しみつつ、しかも一方では脱衣の件、準備体操、全生徒の体の具合、帰り方など全般的な計画者であり配慮者でなければならぬということを痛切に感じた。

△ 山口雄二

七月〇日

生徒と話し合うということ、生徒を職員室へ呼んで叱る（指導する）場面、こんな場面に出くわすと、僕はどうしていいかわからなくなる。判断がつかなくなる。教師に最も高い人間性が求められる時のだろう。僕にはそれが不十分だ、自信がない。もちろん、はじめに問題にぶつかることだと考える。しかし、まず問題にあわてない力を持つこと。

七月〇日

生まれてはじめて授業なるものを僕がした。

教材研究の不十分さが誰よりも自分にはわかった。生徒をなめていたんじゃないかということがある。どんな小さなものにも全力をもって対さない時は失敗する。だから方法もまずかった。早速ヘルマンヘッセの「アポロちよう」の作品評価を自分で徹

底的にやらねばならない。

七月〇日

僕が研究授業をする事になった。例の「アポロちよう」である。

問題はずれて生徒となれあいになったりしてはならない。教室のたのしさ、おもしろさ、笑いは高い次元のものでなくってはいけない。僕はそれを注意するあまりにコチコチの煉瓦になり終ったようである。リーダーとしての立場を守るということは全くむずかしい事だ。

※

（本年度本学文学部学生（教職課程受講者）の教育実習は、去る七月一日から三週間、付属高校、付属中学校において行われた。以上はその時の教生日誌から抜いたものである。）